

「クリティカル・マネジメント研究」(“Critical Management Studies”)の系統的レビュー¹

Systematic Review of “Critical Management Studies”

柳 淳也²

Junya Yanagi

川村 尚也³

Takaya Kawamura

山田 仁一郎⁴

Jin-ichiro Yamada

1 はじめに

クリティカル・マネジメント研究 (Critical Management Studies、以下 CMS と略記す) は、Alvesson and Willmott (1992) が、編集した書籍のタイトルに『Critical management studies』と名付けたことをきっかけに、イギリスを中心とし世界的に広がりを見せている。日本語圏においてもこの流れは一部で紹介されており、比較経営研究学会で 2013 年にシンポジウムが行われたことや、2018 年に CMS 関連学会として、The Japanese Standing Conference on Organizational Symbolism (JSCOS) が設立⁵されるなど、活発に議論されるようになってきている。その他、日本語圏での CMS に関する文献は複数存在している(林, 2013; 高橋, 2019; 清宮・ウィルモット, 2020)が、未だに十分に紹介されているとはいえない。

それゆえ、本研究では、CMS を系統的にレビ

ューし、CMS が学問としてどのように進み、何を問題視し、何が「クリティカル」であり、どのような広がりがあるのかを分析する。

2 方法

本研究では、系統的レビューの手法を採用する (Tranfield, Denyer & Smart, 2003)。Web of Science を用いて、登録文献のトピック (タイトル・キーワード・抄録) に、「Critical Management Studies」(TS = “Critical Management Studies”) という語が完全一致で含まれる文献を検索⁶した結果、282 件の文献⁷が得られた。

上記の初期選考基準で選ばれた 282 文献の中から、さらに、トピック (タイトル・キーワード・抄録) に「review」という語を含むもの限定して検索を行い、31 件の文献を絞り込んだ。この 31 文献すべての抄録を読み、最終的にグループ 1 の文献数は 9 件となった。続いて、年平均被引用回数が多い文献を、30 件選定し、これ

¹ 本報告は、2020 年 12 月 25 日発行の次の文献に準拠している。柳淳也・川村尚也・山田仁一郎(2020)「「クリティカル・マネジメント研究」(“Critical Management Studies”)の系統的レビュー」『赤門マネジメント・レビュー』19(6)。

² 大阪市立大学大学院経営学研究科 (Graduate School of Business, Osaka City University), junya.yanagi1@gmail.com

³ 大阪市立大学大学院都市経営研究科 (Graduate School of Urban Management, Osaka City University), kawamurat@osaka-cu.ac.jp

⁴ 大阪市立大学大学院経営学研究科 (Graduate School of Business, Osaka City University), jinichiro.yamada@gmail.com

⁵ 2018 年設立総会では Mats Alvesson が、2019 年研究大会では、Hugh Willmott が、それぞれ基調講演を行っている。

⁶ なお、大文字と小文字の区別はなく、「Critical management studies」等の表記も含んでいる。

⁷ 言語、ドキュメントタイプ、および分野は限定していない。また、最大限の期間を取得するため、タイムスパンは 1945 年-2020 年 (2020 年 6 月 24 日に検索) とし、追加の選択制限なしに検索を行った。

をグループ2とした。

表1 各グループの文献数

グループ	初期 文献	抽出後 文献	抄録 分析後
グループ1: レビュー論文	31	31	9(2)
グループ2: 年平均での被引用回数の多い論文	282	30	30
合計			35

注) 括弧内は、「ハンドブック」のイントロダクション文献数

3 結果

本研究では、「Critical Management Studies」という語を用いて系統的レビューを行い、CMSの歴史的経緯、特徴づけるもの、主流の経営学や批判理論との差異等を記述した。CMSはイギリスを中心として発達してきた研究分野であり、発達の背景として、イギリスの教育制度やビジネス・スクールへの社会的要請、政治的な背景が重要であった。近年CMSは、ヨーロッパ以外の多くの国/地域での広がりもみられ、理論的視点と問題の焦点もますます多様化している。こうした多様性があるため、CMSを簡潔に定義することは難しいが、資本主義、家父長制、帝国主義的な社会的構造によって条件付けられる組織活動を問題視し、パフォーマンス志向を受動的に追認することのない、研究者の再帰性を伴う経営学の研究領域であるといえるだろう。またCMSの特徴は、非自然化(Denaturalization)、再帰性(Reflexivity)、(非)パフォーマンス志向((Non) performative intent)の3点であることが明らかとなった。さらに、近年、パフォーマンス志向についての議論から発展した批判的的行為遂行性に関する研究が多くみられる

ことも明らかとなった。

表2 「CMS」の主要概念と主流の経営学の位置付け

	CMS (クリティカル・マネジメント研究)			主流の経営学
	批判理論 労働過程論	ポストモダン思想	批判的的行為遂行性	
非自然化 (Denaturalization)	○ (解放的な知識の創造、啓蒙)	○ (経営(学)の批判、脱構築、差異の承認)	○ (経営(学)の批判、脱構築、差異の承認)	×
再帰性 (Reflexivity)	○	○	○	×
(非) パフォーマンス志向 ((Non) performative intent)	解放的な変革を志す 向	(非/反)パフォーマンス志向	経営実践への行為遂行的な関与 向	

参考文献

- Alvesson, M., & Willmott, H. (1992). Critical theory and management studies: An introduction. In M. Alvesson, & H. Willmott (Eds.), *Critical management studies* (pp. 1-20). Newbury Park, CA: Sage. 邦訳, M・アルベッソン, H・ウィルモット (2001)「批判理論と経営学—イントロダクション」『経営と社会: 批判的経営研究』(1章). 杉原周樹 訳. 同友館.
- 清宮徹, H・ウィルモット (2020)「クリティカル・マネジメント研究と組織理論」高橋正泰, 大月博司, 清宮徹 編著『経営組織論シリーズ 3: 組織のメソドロジー』(高橋正泰 監修)(8章). 学文社.
- 高橋正泰 (2019)「CMSと組織研究—グランド・セオリーの復権か」『明治大学社会科学研究所紀要』57(2), 237-261.
- 林正樹 (2013)「AOM (Academy of Management) における CMS 分科会の動向」『比較経営研究』(37), 98-102.
- Tranfield, D., Denyer, D., & Smart, P. (2003). Towards a methodology for developing evidence-informed management knowledge by means of systematic review. *British Journal of Management*, 14(3), 207-222. doi: 10.1111/1467-8551.00375